

蘇芳集

ひとりでに

青山

丈

開けるたび靴の底の秋扇
年上の老人に柚子もらひけり
家近くいきなり咲いて曼珠沙華
鶏頭を数へて曲る角のあり
行き当ることなけれども鰯雲
少しづつ遠出の出来て真葛原
ひとりでに秋の簾となつてをり

屋根草と

野路斉子

小鳥来て煙突探す最早なき
屋根草と遊ぶ一鳥霧晴れて
色鳥は知らずよそう身華美なるを
木犀の花への記憶さまさまに
森何処か木々の秘蔵の返り花
拾つてはならぬ団栗木々のもの
冬支度男所帯を祖母が守り

午 睡 別府 優

茅舎忌の藺草すがしき家居かな
ごろごろと根菜煮込む大暑かな
鳴焼や手首の細り握りみる
気負ひ立つ影持ち歩く炎天下
荷に足せる玉子の重み原爆忌
蟻の巢の砂噴いてゐる敗戦忌
望郷の土の匂ひの午睡かな

ことごとく

前田 陶代子

秋口の雲の白さを水の上
昨日よりけふよく晴れて蓮の実
翳りなき橋の全長九月来る
ことごとく濡れてゐたりし螢草
ずぶ濡れの大樹匂へる厄日かな
赤檜の木洩日後のころもがへ
紅葉はじまる一水の向う側

秋ざくら

峰岸 よし子

夜に入りし山の容や稲の花
ちちははの知らぬ日日生き魂迎
対岸の闇深くなる魂おくり
手さぐりに鍵穴さがすつづれさせ
虫の夜のねむりは波に入るやうな
底紅やこのごろ化粧なほざりに
尽くすべき人ある余生秋ざくら

日の真つ平ら

宮尾 直美

四万十の鮎築に日の真つ平ら
蟻をくぐりて渡る沈下橋
一匹は淋しと沈む夜の金魚
暮れ残るもののひとつに蟬しぐれ
失ひしものを思へり晩夏かな
ひぐらしやひつそりとくる一つの死
庭すでに秋めくものの実をつけて

秋 蟬

八木下 末黒

自転車を降りて曳きゆく片陰り
広島忌青い毬栗落ちてゐる
三つに折るせんべい蒲団敗戦日
薯食うて水飲む八月十五日
新盆へバイク走らす九十九里
日の落ちて庭掃きはじむ法師蟬
秋蟬の少なくなりし日暮れかな

生姜市

吉田幸敏

祈りの月

木内憲子

八月や花掛水は田を奔り
遠くでもピアノ八月十五日
戦争を語ることなく休暇果つ
秋の蟬朝比奈谷戸に師を訪はな
師を恋へば背山のつくしこひしかな
耳元の声に覚えや生姜市
寄り道の子規の糸瓜の恙かな

八月の蟬

小川美知子

居付いたる句帳の蟻を振り落とす
翅閉づるごとく日傘を閉ぢにけり
道失くすと白さるすべり立つてゐる
橋上で水を見てゐる原爆忌
ゆく夏の硝子の欠片のやうな蝶
雲梯の手のつぎつぎと秋の風
八月のみんなん蟬を浴びるほど

日がかつと射して八月さるすべり
ひと日逝き夏ゆく雲の湧きにけり
みそはぎの祈りの月といふ赫さ
鳥舎冥くて八月のはじまりぬ
いよいよといふやうに八月の蟬
このごろはと文書き出して夜の秋
吾と対す樹の数本をもつて秋

きつぱり

小島みつ如

丸一日きつぱり咲きて仏桑華
二日目は傘たたむごとく仏桑華
三日目はや根元に眠る仏桑華
墓みちの向日葵笑まる法要日
色づきし鬼灯加ふ墓明るし
奉納の塔婆の匂ふ秋時雨
仏桑華盆もまつ赫に咲き継ぎぬ